

『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』発行にあたって

佐々木 嘉則

昨年に続き今年も、『言語文化と日本語教育』の増刊特集号として『第二言語習得・教育の研究最前線 2003 年版』を発行する運びとなった。幸いにして前号が大方の好評を得、各地の大学図書館や国内外の研究者も含めて多くの方々から入手方法や内容に関するお問い合わせをいただいたことに勇気づけられての第二弾発行である。今回は『言語文化と日本語教育』の発行主体である日本言語文化学会の会員からの 10 本の投稿論文を各 2 本ずつ 5 章に分けて収めたのに加え、講演録ならびにその解説記事を掲載している。投稿論文執筆者のうち 2 名は既に専任職/常勤職に就いている現職の大学教員である。

序章「第二言語習得研究の論点」には白井恭弘氏の講演録「第二言語習得研究とは何か」を収録した。(本号収録にあたって白井氏に補筆をいただいた。) この講演は主として初学者を対象に、第二言語習得論 (SLA) の主要な論題を一通り紹介したもので、これから SLA を学ぼうとする学部生や知識の整理確認をはかりたい大学院生が大部の教科書ないし概説書に取り組む前に分野全体の見取り図をつかむためにはとりわけ好適な(再)入門文献といえよう。SLA の概論授業では開講当初に受講生にこの講演録を読ませて分野の全体像を把握させてから各論に移るといった展開も可能だろう。なお、講演では時間の制約のために詳しい説明が省略された専門用語や学説を説明するため、用語集と解説記事を付したので併せてご活用いただきたい。

それに続く第 1 章「文法形式とその機能の習得」は、名詞修飾節(大関浩美氏)と指示詞(森塚千絵氏)の習得に関する論考を収めた。大関氏の論考は前号における名詞修飾節(関係節)研究の概括的なレビュー(齋藤(大関)2002)の続編ともいえる。今回は、言語類型学における関係節の有標性の序列である Noun Phrase Accessibility Hierarchy (NPAH)

が第二言語習得における関係詞習得の難易度と相関しているという知見をとりあげ、その理論的説明として様々な選択肢を挙げたうえ比較検討している。一方、森塚氏は日本語指示詞の用法に関する様々な先行学説を概観した後、それらを踏まえて独自のモデルを提案するとともに、そのモデルに基づいておこなわれた実証的な習得研究の成果を紹介している。

第 2 章「語彙・文字の習得」は語彙・文字の習得に関する谷内美智子氏と陳毓敏氏の論文を収めた。谷内氏も大関氏と同じく前号掲載の概観論文(谷内 2002)を踏まえ、今回は付随的語彙学習に論考を加えている。一方、陳氏は語彙の中でも中国語母語話者の漢語(漢字熟語)習得に的を絞ってこれまでの研究成果を詳しく紹介している。

第 3 章「音声の習得と評価」は音声に関する論文を集めた。小池圭美氏は日本語学習者の発話の音声的側面に対する評価がどのような要因によって決定されるのかを論じた先行研究を概観している。石崎晶子氏の論文は発話中のポーズに的を絞り、習得・評価など様々な角度からおこなわれた先行研究を総括する中で、これまでのばらばらだった分析基準を検討し、学習者の発話の特徴を記述していくための分析基準のありかたを検討したものである。

以上の 3 つの章はいずれも言語を文法・語彙・音声という要素に分解して論じたものであった。これに対し第 4 章「社会的行為としての言語使用」は実際の対人コミュニケーション行動としての言語使用に関する論考を収めた。前号で陳姿菁氏(2002)があいづち行動全般を広く概観していたのに対し、柳川子氏は今号で日本語学習者のあいづちに絞って研究方法や知見に関しさらに詳細な分析を加えている。一方、徳永あかね氏は、従来日本の学界では SLA との関連においてのみとりあげられることの多かったフォリナートーク研究がもともと欧米の社会言語学に源流を発したものであることを指摘し、この研

究史上の来歴が日本でともすれば等閑視されがちであるために生じている研究テーマ上の偏りに対して警鐘を鳴らしている。

ここまでの4つの章が言語習得や言語使用に関して理論的な考察を加えた論文を集めていたのに対し、第5章「日本語教育の過去・現在・未来」は日本語教育の実践とその歴史的・社会的背景に関する2本の論文を収めた。このうち19世紀末以降の韓国における日本語教育史の諸研究を概観した河先俊子氏の論考は、「過去」を経て「現在」に至る日本語教育の道のりを振り返るものといえる。一方、大島弥生氏の論考は母語話者大学生に対する表現教育と外国人留学生に対するライティング教育の統合的な全体像を描き出し専門教育との連携を図ることを目指した大作であり、「現在」の日本語教育の現場における喫緊の課題を提起するとともにその「未来」を展望したものといえる。

以上の5章の後には、李貞暎氏の前号掲載論文に関する補遺を収めた。

今号も大島氏(全27ページ)、森塚氏(全26ページ)の論考をはじめ、斯界の国内他誌ではあまり見られないような渾身の長編論文が目白押しである。「枚数制限を事前に設けない」という方針を投稿募集時から明示したため、投稿者には存分に筆を奮える場が提供できたことと思う。ただしその結果、査読協力者にはしばしば長大な論考を御審査いただくことになった。また、長短を問わず質の高い論文を揃えることができたのも懇切な査読評・修正意見をいただいたおかげである。査読にあたってくださった各分野の碩学のご協力にあらためて御礼申し上げたい。

なお、前号同様、今号でも収録した投稿論文は「動向報告」と「展望論文」の二つの範疇に分け、査読者にもこの類別を念頭においてそれぞれの基準で御審査いただいた。動向報告が「研究の流れや関連する概念・学説を的確に紹介することで新進研究者にとって資料的価値のある有益な文献」、展望論文がこれに加えて「未解決の研究課題に対する解答ないし解決策(または有力な手がかり)を新たに提案する、あるいは先行研究の論点を新しい角度からとらえ独自の再整理・総括をする、メタ分析によってこれまで知られていなかった全体像を描き出すなどのオリジナルな貢献が顕著にみられるもの」という特徴づけも、前号の方針を踏襲している。

ただし、この区分は研究分野自体の学問的成熟度やレビューの範囲設定など様々な要因に左右されるので、個々の収録論文の絶対的な質の評価や、ましてや著者の研究能力に対する格付けを意図したものではない点にご留意いただきたい。状況によっては最初から「動向報告」の枠内に筆先を絞って先行文献の徹底した記述的整理を完成させるのも一つの妥当な執筆アプローチであり、むしろその時々でそういった柔軟な戦略決定ができることが研究者としての懐の広さを示すものであると考えられるからである。

執筆上の戦略といえば、本号に収録された論文がいずれも各投稿者にとっては長期的な研究計画の一環として執筆されたものであることはいうまでもない。例えば、このところ学位論文の完成に向けて研究を推進している大関氏と谷内氏はいずれも、2年前の博士後期課程入学の年に起稿したどちらかといえば記述的な概観論文(前号掲載)を足がかりにして、今号では理論面で一段と踏み込んだ議論を展開している。このように一つのトピックをめぐる異なる角度から複数本のレビュー論文を書き重ねつつ論考を深めることによって今後取り組むべき重要な研究テーマが明確に浮かび上がるうえ、学位論文のうちの何章かの骨格は自然にできあがっていくわけである。

現に、前号にレビュー論文を投稿掲載した19名の博士後期課程の大学院生(発行当時—池田玲子氏は前号発行時に既に学位取得済み)のうち6名(杉浦まそみ子、松田文子、小熊利江、金志宣、陳姿菁、尹松)はその後今日までに博士号を正式に取得しており、近々さらに数名がそれに続く勢いである。その多くの場合、前号掲載のレビューがほぼそのまま博士論文の一章ないしその一部となっている。それぞれの研究分野の最先端を全力で切り拓いている気鋭の若手研究者達からみた生々しい現場の眺望を、いち早く収録公開した最新リリース版が本論文集であるということもできよう。

最後に、このレビュー論文集シリーズ発行の企画を広く知っていただくため、次のアドレスに仮設ホームページをたちあげた。収録論文の目次・要旨などのほか、次号の投稿募集や誤植が発見された場合の正誤表なども順次掲載していく計画であるので、以後お見知りおきいただきたい。

<http://jsl2.li.ocha.ac.jp/saizensen/>

謝辞

多忙をおして短期間の間に綿密な講評をお寄せくださった 38 名の査読協力者の先生方、講演録の掲載をご快諾くださったほか前号以来継続的に企画編集上等の様々な助言をくださっている白井恭弘氏に深く御礼申し上げます。編集事務局実行委員の遠山千佳・柳川子の両氏には執筆者との連絡調整・書式点検・装丁企画などの実務に御活躍いただいたほか、野々口ちとせ氏（日本語教育コース助手）、金孝卿氏、石崎晶子氏および前号実行委員の大関浩美・谷内美智子両氏からも実務作業に関してさまざまな助言と技術指導・ノウハウ提供を含む御助力をいただいた。（遠山・柳・石崎・大関・谷内の 5 氏は、論文執筆者としても本号に登場している。）Richa Ohri 氏からは、英文目次の準備にあたって協力を仰いだ。木山三佳氏には経理事務等の担当者としてこのプロジェクトを背後から支えていただいている。また、本特集号を市販ルートに乗せるにあたって御協力いただいた凡人社と、今回も厳しいスケジュールの中を迅速に印刷製本作業を進めていただいた平河工業社にも感謝申し上げたい。なお、前号同様、本号の刊行も日本語習得・教育に関する研究のレビュー論

文集編纂を目的とする長期プロジェクトの一環であり、このプロジェクトは 2002 年度から文部科学省科学研究費補助金¹の助成を受けている。

注

1. 「第二言語としての日本語習得研究のレビュー論文集編纂と刊行・オンライン配信」基盤研究（C）（2）2002～2004 年度 課題番号 14580326

参考文献

- 齋藤（大関）浩美（2002）「連体修飾節の習得に関する研究の動向」『『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学会研究会 45-69.
- 陳姿菁（2002）「日本語におけるあいづち研究の概観及びその展望」『『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学会研究会 222-234.
- 谷内美智子（2002）「第二言語としての語彙習得研究の概観・学習形態・方略の観点から—」『『連体修飾節の習得に関する研究の動向』『第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ—』日本言語文化学会研究会 155-169.

ささき よしり／お茶の水女子大学